

小学館本『住吉物語』の本文の素性

岡崎和彦

はじめに

数多い『住吉物語』諸本群の中にあつて、ひととき特異な内容を持つテキストとして注目されるのが、小学館所蔵の『住吉物語』(絵巻三軸。以下小学館本と略称)である。

小学館本は、長谷観音の靈験に加えて、他の諸本に見られない〈恋路に迷う者の逢瀬をかなえる神〉住吉明神の靈験を語っており、とりわけ靈験譚の色彩の濃厚なテキストである。そのため、共通祖本への遡及に力を注いでいた従来の研究においては末流本文程度の扱いしかなされてこなかったが、視点を変えれば、『住吉物語』の室町時代物語化を考える上で格好の素材であると言えよう。

しかし、『住吉物語』の室町時代物語化という一種の改作の問題を考えるには、まずそのテキスト自体の素性について明らかにしておかなければ非常に危うい。小学館本については、同本の紹介者である桑原博士氏によって、

小学館本は、本来、第一類本のような略本であつたのに、主として後半に手を加え、八代集を中心にした和歌、伊勢物語古注

釈の知識などをもとに、変形増補されたテキストと考えられる。(注1)

という指摘がなされているに過ぎず、未だ十分な検討は行われていない状態である。そこで本稿では、小学館本の本文の素性について改めて検討を加えることにしたい。

『住吉物語』の諸本については、友久武文氏が系統類別された十八系統十九本の代表本文のうち、未見である鈴鹿本を除いた十八本に、資料館本(国文学研究資料館所蔵米田氏旧蔵本)を加えた十九本を調査の対象とする。(注3) また、これらとは別に、小学館本と同系統の残欠本である野坂本(冊子本。親本は絵巻であつたと思しい)も随時参考にする。(注4)

一、前半部の本文の素性

和歌の所収状況などから、小学館本中巻の途中までが「第一類に属する略本系統とほとんどかわらない」という桑原氏の指摘があるが、詳細に見てゆくと、中巻のほとんど、姫君一行が京を離れて淀に着く場面まで(以下小学館本前半部と呼ぶ)の本文は、第一類諸

本の中でも成田本と同系統のテキストと認められる。

小	成	藤	京	徳
1	1	1	1	1
2	2	2	2	2
3	3	3	3	3
4	3(4)	4	4	4
5	5	5	5	5
6	6	6	6	6
7	7	7	7	7
8	8	8	8	8
9	9	9	9	9
10	10	10	10	10
11	11	11	11	11
12	12	12	12	12
13	13	13	13	13
14	14	14	14	14
15	15	15	15	15
			9	
			10	
				12

わかりやすいところで、まず小学館本前半部の和歌の所収状況を他の第一類諸本と比較すると、右の表の通りである（数字は通し番号。連歌は教えない）。成田本には二分の落丁があり、4の「白雪の」の歌は見られないのだが、『住吉物語』諸本のほとんど全てにこの歌があることからすると、成田本の落丁部分に4の歌が存在したと考えられるので、仮に補った。すると、この表でわかるように、小学館本前半部の和歌の所収状況は成田本と全く一致する。

また、本文の異同から見ると、藤井本の本文の方に近いところも部分的には認められるが、全体的にはやはり成田本の本文の方に最も近い。成田本と藤井本との大きな違いである、筑前の性別（成田本は女、藤井本は男）や、嵯峨野の野遊びの場面における姫君の衣装（成田本は藤襲、藤井本は桜襲）などについても、小学館本は成田本と一致している。

このように、小学館本前半部の本文が成田本系統であるということは、『住吉物語』の諸本研究上極めて大きな意味を持つ。

現存する『住吉物語』諸本群の中で、どのテキストが共通祖本の姿を最も残しているかということに関して、従来諸説あったが、最

近は成田本善本説が通説となりつつある。成田本善本説を前提とした研究が一層増えるであろう今後の研究状況を思うとき、何にもまして現存成田本の本文を相対化してくれる同系統のテキストの出現が望まれるわけであるが、小学館本は、前半部のみとは言え、現在知られている諸本中唯一の同系統の本文を有するテキストとして、まことに貴重なものと言えるのである。

二、後半部の本文の素性(1)——長歌の本文異同——

小学館本前半部の本文が成田本系の本文であることは確認できた。果して、後半部（中巻末尾の、姫君の失踪を知った中納言家の悲しみの場面以降）は、この成田本系統のテキストに手を加えたものであるのだろうか。

小学館本後半部の所収和歌は二十七首（うち長歌一首）あるが、これと成田本後半部の所収和歌八首との対照表を示すと、次の通りである。

成	小
16	16
17	17
18	18
19	19
20	20
21	21
22	22
23	23
	24
	25
	26
	27
	28
	29
	30
	31
	32
	33
	34
	35
	36
	37
	38
	39
	40
	41
	42

小学館本後半部は、成田本の和歌八首を同じ順序で全て含んでいる。17 20 21 26 32 36 39の七首は他の諸本（特に広本系）に見られるものであるが、この七首と成田本の八首を全て合せ持っているテキストはない。残りの十二首は小学館本独自のものである（うち、18 22 23 24 27 28 37の七首は『後拾遺集』を中心とした八代集歌およびその改作歌）。この結果からすれば、小学館本後半部は、成田本系統のテキストの後半部に広本系のテキストの和歌および八代集歌を増補す

るなど大きく手を加えたものと考えても不都合はない。

では、本文異同の面から見るとどうであろうか。小学館本後半部の本文は他のどのテキストとも異なっており、しかも他のテキスト同士もそれぞれに相異なっているので、全体を比較することは困難であるが、「朝顔の」の長歌はすべてのテキストが持っている上に、音数律の関係で本文対校が可能であり、しかも比較的まとまった分量があるので計数的処理も行いやすい。そこで、この長歌の本文異同から後半部の本文の素性を探ることにする。異同は小学館本の本文を底本として句単位で見ると、はじめに、本文対校に用いた照合番号と小学館本の長歌本文を示す。(テキストによっては、小学館本にない句を持つものもある。対校可能な場合は該当箇所には照合番号のみ記してそれを示した。)

- 1 あさがほの 2 花のうへなる 3 露よりも 4 はかなき物は
5 かげろふの 6 あるかなきかの 7 こゝちして 8 よを秋風
に 9 うちなびき 10 むれ入たづの 11 わかれつゝ 12 たゞ我
ひとり 13 ありそ海の 14 かひなき浦に 15 しほたるゝ 16 あ
まの衣で 17 我がごとく 18 ほしぞわづらふ 19 日をへつゝ
20 思ひますだの 21 ねぬなはの 22 くる人もなき 23 あしひき
の 24 山下水の 25 あさまじう 26 ながれ出し 27 ふるさと
へ 28 かへらん事も 29 おもほはず 30 いかにか契りし 31 いに
しへの 32 むくひなればや 33 たらちおの 34 中をはなれて
35 つるの子の 36 雲るはるかに 37 たちわかれ 38 行衛もしら
ぬ 39 しらなみの 40 よるの衣を 41 かへしつゝ 42 ぬる夜の
夢の 43 ゆめならで 44 恋しき人を 45 みちのくの 46 あぶく
ま川を 47 わたるべき 48 我身ならねば 49 さゝがにの 50 く

もでに物を 51 おもふかな 52 53 鳥の声だに 55 をともせず
56 とをちの山の 57 たにふかく 58 くちははつれど 59 60 61 む
もれ木と 62 成はてぬべき 63 64 65 66 67 我身成けり
紙数の都合で諸本間の異同を具体的に示すことは省略し、右の六
十七句について、小学館本との一致の割合を示すと、次の通りであ
る。(表記の違いは問題としない。)

一致率 (%)	句数	一致句数
70.1	47	成藤
73.1	49	京徳
95.5	64	白多
82.1	55	住晶
77.6	52	筑契
56.7	38	横正
82.1	55	御白
68.7	46	陽大
71.6	48	真資
70.1	47	
71.6	48	
76.1	51	
77.6	52	
46.3	31	
70.1	47	
73.1	49	
74.6	50	
77.6	52	

(一致率は小数第二位を四捨五入した。)

この表に明らかのように、小学館本の長歌本文との一致率は、京
都本(京都国立博物館所蔵、絵巻三軸)が九五・五パーセントと最
も高く、徳川本・住吉本の八二・一パーセントがこれに次ぐ。京都
本は、実に二位以下に一三・四パーセント以上の差をつけているの
であり、一致の割合は諸本中群を抜いている。しかも、小学館本に
ない59・60の「年をへて 人に知られぬ」の二句を、同様に欠いて
いるのは右の十八本中京都本のみなのである。ちなみに成田本の一
致率は第十三位の七〇・一パーセントと低い。

以上、わずかに長歌の本文異同を見たに過ぎないが、右の結果
は、小学館本後半部の本文のベースになっているのは成田本系統の
テキストではなく京都本系統のテキストではなからうかという疑念
を起こさせるに十分なものである。もしそうだとすると、小学館本
は二種のテキストの取り合せ本ということになる。

三、後半部の本文の素性(2)

——広本系の和歌の増補の痕跡——

小学館本後半部が京都本系統のテキストをベースとしたものであるとすると、小学館本後半部の和歌のうち、他の諸本にあって京都本にないものは、広本系のテキストからの増補ということになるのだが、小学館本にその増補の痕跡は認められるであろうか。

まず、京都本と小学館本の和歌対照表を示す。○で囲んだのが、テキストによってはあるが京都本にはない和歌で、全部で八首ある。京都本後半部の物語中の和歌は同じ順序で全て小学館本後半部に存している。

小	京
16	11
17	
18	
19	
20	
21	12
22	
23	
24	
25	
26	
27	13
28	
29	
30	
31	14
32	
33	15
34	
35	
36	
37	
38	16
39	17
40	
41	
42	

次に、問題の八首について見てゆくことにする。

〈19・20・21番歌〉

あま君のもとへおはしつきぬ。……ひめ君の御そでのいた

くぬれけるを、あま君かなしみ奉りて、

住吉のあまとなりてはすぎしかどかはかり袖をぬらし

やはせし(19)

いたくしほれ給へば、じょう、

わたつみにまだおりたゝぬあまなれどしほたれにける

君をみるなり(20)

ときこゆれば、ひめ君、

ふる里をこぎはなれ行うきふねはたゞなみだにぞぬれ

わたりける(21) かやうにうちながめ給。

家を出た姫君・侍従と尼君とが住吉到着後対面し、家を出るに至ったいきさつを語る場面である。これより先にもほぼ同内容を持つ京内での対面場面があるが、こちらは淀に着いた記述の後にあることや、続いていきなり尼君の庵室の描写が始まることからすると、ここで言う「あま君のもと」というのは住吉にある尼君の家であろう。

さて、小学館本ではこの三首は、右の引用のごとく住吉での対面場面における尼君・侍従・姫君の三人の唱和歌となっているのだが、テキストによって詠まれた場面・詠者に違いが見られる。しかもこの三首をすべて持っているのは白峰本・真銅本に過ぎない。

小学館本は21番歌を住吉到着後の詠としているが、この歌を有する他のテキスト(住吉本・御所本・白峰本・陽明本・真銅本)はいずれも住吉へ向う船中での詠としている。歌の内容からすれば、やはり京を離れて住吉へと向う船中の詠とする方がふさわしく、小学館本におけるありようは不自然である。また、小学館本は20番歌を侍従の詠としているが、他のテキスト(白峰本・陽明本・真銅本)はいずれも尼君の詠としている。歌の内容からすれば、小学館本のように侍従の詠でも特に不自然さがあるわけではないのだが、そのようになっているのが諸本中唯一小学館本のみであるという点にはやや不審が残る。

小学館本に見られるこのような不審な点は、住吉での対面場面に三首の歌を集めて尼君・侍従・姫君三人の唱和の場面を作ったために生じたものと思われる。

この住吉での対面場面には絵はないが、これより先の京内での対面場面の方には絵がある（中巻第九回）。ところが、この絵は松のある浜辺の風景を背景とした簀子敷きの縁の家に袖を顔に押し当てている尼君と姫君、うつむいている侍従の三人を描いているもので、京内の場面ではない。住吉の尼君の家を描いている下巻第一回との家・背景の類似から見ても、これは明らかに住吉の図である。しかも、絵の内容は右に引用した住吉での対面場面の内容に対応している。それゆえ、中巻第九回は、本来は右の引用場面の直後であったものと考えられる。おそらく、19・20・21番歌は本来この画中に書き込むことにより増補したもので、線で囲んだ部分はそれを詞書として本文化したものであろう。

〈26番歌〉

こま／＼と文あそばして、おくに、
あさがほの……我身成けり(25)

世の中のうき身ひとつをありわびてしらぬはまべにと
しをふる哉(26)

とく／＼たり。

住吉の尼君のもとに身を寄せた姫君が、京の父のもとへ自分が健在であることを知らせる手紙の奥に書き付けたもので、「あさがほの」の長歌と連作になっている。この26番歌は、他のテキスト（晶州本・横山本・御所本・白峰本・陽明本・大東急本・真鍮本・資料館本）では全て、小学館本にはない姫君が住吉の浜を逍遙する場面における姫君の詠としている。内容からすれば、この歌は浜逍遙の場面にこそふさわしい。したがって、26番歌は増補歌であると考へ

られる。

なお、17番歌も、

なき名のみたつたの山のうす紅葉ちりて跡なき身とぞなりぬる
(16)

わかれぢは我心よりかたなれどとゞめがたきはなみだ成けり
(17)

のごとく、16番歌と連作になっている。他のテキスト（多和本・白峰本・大東急本・資料館本）においてもこの二首は連作になっているので、直ちに増補とは言いがたいが、26番歌の場合同様、既に歌のあるところに連作の形で書き加えたものと見ても不都合はない。

〈30番歌〉

たづねつゝふかき山ぢにまどふかな君がすみかをそことしらせ
よ(30)

少将（この時点では既に中将に昇進しているが、以下少将で統一）が長谷寺に参籠して靈夢を蒙った同じ晩に、住吉にいる姫君は少将の夢を見る。30番歌は、その時夢の中の少将が詠んだ歌であるが、京都本はこの住吉の場面全体がそっくりない。広本系のテキストとの接触によって小学館本にこの場面だけが増補されたとは考えにくい。しかし、この場面を持たないのは京都本だけであって、他のテキストは全て持っている。したがって、断定はできないが、これは現存京都本系統の省略で、小学館本後半部のベースとなった京都本系統のテキストにはあったという可能性もある。

〈36番歌〉

おどろかせて給て、「あなゆゝし。いかゞして是まではおはし

ぬるぞや。あま君、出あひ給ひて、返し給へ。もしたづねたまふこともあらば、ゆめく／＼しらぬよしの給ひて、返し給へ」とぞの給ける。中將、

たつ浪のゆく衛もしらぬ君ゆへにたづねてぞこし住吉の里(36)

(下巻第六図)

あま君いであひ、「いかなる人にておはしまし候ぞや。……

少将が突然住吉まで訪ねて来たので、姫君達が驚き慌てている場面である。36番歌はこの場面の一連の叙述を中断させる形で割り込んでおり、極めて不自然である。この時、36番歌が絵の直前にあるということが注意される。下巻第六図は、少将が松葉搔きの童子に道を尋ねている場面(画面右側)と、尼君の家の前で少将が中の様子を窺っている場面(画面左側)とを異時同図法によって描いたものである。おそらく36番歌は、本来この画中に書き込まれていたもので、それを詞書本文に単純に取り込んでしまったために物語の叙述を中断させてしまうことになったのであろう。「中將」の語は、行間末に書き加えられている。絵の中から取り出された結果不明瞭になってしまった和歌の詠者を明確にするため後から補ったものである。36番歌は、他のテキスト(晶州本・契沖本・御所本・陽明本・真銅本・資料館本)では、御所本以外は全て、姫君の声を聞いた少将が尼君の家の戸を叩く場面で詠む歌となっている。下巻第六図には前述のごとく同様の場面が画面左側に描かれているので、36番歌を画中に書き込む可能性は十分にある。小学館本後半部と同系統のテキストである野坂本にはこの歌および「中將」の語が見えな

いことも、以上の想定を支えてくれる。

〈39番歌〉

たがひに見をくり、かへりみて、やう／＼御船もとをぎかるからに、くもきりのあつくへだ／＼りければ、じょう、

はかなくて我住なれしすみの江の松の木ずゑのかくれ行かな(39)

と詠じければ、ひめ君、

住吉の松のこずゑやいかならんとをぎかるにも袖はぬれけり(40)

かやうにの給ひてのほり給ふ程に、……

姫君と侍従が少将に伴われて住吉を離れる場面である。39番歌は、40番歌との唱和歌になっている。この二首について、諸本での詠者を示すと、次の通りである。(姫は姫君、侍は侍従、尼は尼君、空欄はその歌のないことを表す)

小	成藤京徳	臼多住	晶筑契	横正御	白陽大	真資
39侍			姫	姫	姫	侍
40姫	侍	姫	姫	侍	侍	侍
	侍	侍	侍	侍	侍	侍
						尼

小学館本は39番歌を侍従の詠としているが、この歌を有する他のテキストは、資料館本以外は全て姫君の詠としている。この歌は、『風葉和歌集』巻八羈旅・五八八に姫君の詠として採録されており、また歌の内容も侍従よりはヒロインである姫君の詠とする方がふさわしい。それゆえ、39番歌を姫君、40番歌を侍従の詠とするテキス

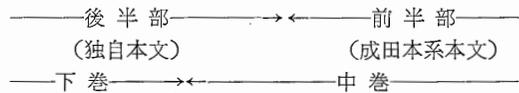
トの詠者を変えて小学館本のような形にしたということも、40番歌を侍従の詠とするテキストに39番歌を詠者を変えて増補して小学館本のような形にしたということも、ともに考えにくい。しかし、40番歌を姫君の詠とする藤井本・京都本・徳川本・陽明本のようなテキストに39番歌を侍従の詠として増補したということならば十分に考えられる。39番歌を侍従の詠と変えることになるのだが、既に姫君の詠として40番歌が存在しているところにもう一首加えて唱和の場面にしようとするならば、侍従の詠として加える他あるまい。

以上、小学館本後半部の和歌のうち、他の諸本のどれかにおいて京都本にない八首六箇所について見てきた。30番歌についてはなお問題が残るが、他の七首については、既に和歌のあるところに連作・唱和の形で一首を加える方法による増補、画中に書き込む方法による増補という、きわめて簡単な方法による増補過程を想定できた。したがって、前述の長歌の本文異同の結果と合せ考えるならば、小学館本後半部の本文は京都本系統のテキストをベースとしたものであると見ておおむね間違いのないであろう。

四、重複する対面場面——取り合せの痕跡——

テキストの前半部と後半部とで本文の素性を異にするということ、小学館本が取り合せ本であることを意味するわけであるが、その取り合せの痕跡は認められないだろうか。

継母の奸計から逃れるべく、姫君と侍従は住吉の尼君と相計って家を出る。そして二人は尼君と対面し、こうなるに至ったいきさつを詳しく語るのであるが、前述のように、小学館本にはこの尼君との対面場面が二箇所に見える。



さても、あま君のもとに行で、かきくどきてこまぐとかたれば、あま君、「まことに、とをきみちまでおぼしたつもことほりにこそ侍れ。いまもむかしも、まことならぬおやこのあまさましき、あまゆゝしく。かゝるうきよなれば、思ひすて、侍りつる物を」とて、すみぞめの袖もしぼるばかりにぞ有ける。

(中巻第九回)

〈姫君失踪後の中納言家の様子〉(本文省略)

(中巻第十回)

あま君のもとへおはしつきぬ。じゞう、ことのしさいをくはしくかたり給ふ。あま君、もろともになみだをこぼし、「いかなる御まゝはゝなれば、いづくをにくませ給ふらん」とて、なきるたり。ひめ君の御そでのいたくぬれけるを、あま君かなしみ奉りて、……

対面した場所に京と住吉という違いがあり、また本文も異なっているのだが、内容的には重複の感は禁じ得ない。また、このように対面場面が二つあるテキストは他にはなく、やはり不自然である。

小学館本に見られるこの重複現象は、尼君との対面場面を京内でのこととする成田本系統のテキストと、住吉でのこととするテキストとを取り合せた結果生じたものであると思われる。内容は重複するのだが、場所も異なり、しかも住吉での対面場面には先に見た尼君・侍従・姫君の歌の唱和(19・20・21番歌)があることから、どちらか一方を削除することができずに両方を残したのである。ちなみに、尼君との対面場面を住吉でのこととするテキストは京都本

と真銅本のみであり、しかも京都本の方は小学館本と同様に住吉で
のことであることを明示していない。

また、京内での対面場面は成田本系統の本文であるが、成田本で
の尼君の言葉は、

まことに、とをきみちまでおぼしたつもことはりにこそ。いま
もむかしも、まことならぬおやこの中のゆゝしさよ。まゝはゝ
ながら、いづくをにくしとみたてまつるらん。あなあさまし
く。かゝるうきよなれば、おもひすてゝぐしはんべるもの
を。

のごとくで、小学館本は成田本の傍線部に相当する部分を欠いてい
る。ところが、この欠けている部分が住吉での対面場面における尼
君の言葉「いかなる御まゝはゝなれば、いづくをにくませ給ふら
ん」として見えているのである。これは、京内での対面場面の尼君
の言葉から傍線部分を削り、そこに残したものを住吉での対面場面
の尼君の言葉から削るという操作を行うことにより、取り合せによ
って生じる本文の重複を出来るだけ避けようとしたことを示してい
よう。京都本の尼君の言葉は成田本と大差ないので、取り合せた時
点ではほぼ完全に重複していたと思われる。

さらに、先に19・20・21番歌の増補について見た時に中巻第九回
の移動について述べたが、この移動は、取り合せの結果絵を伴った
住吉での対面場面の前に京内での対面場面ができてしまったために
行われたと思われる。画中の三首が詞書本文化して住吉の場面に残
っているので、画中歌の詞書本文化は取り合せ以前に既に行われて
いたのであろう。

以上のように、小学館本には取り合せの痕跡を見て取ることがで

きるのである。

おわりに

小学館本の前半部と後半部とはそれぞれ別のテキストに依拠して
いる。前半部は成田本系統のテキストであり、後半部は京都本系統
のテキストをベースに広本系の和歌を増補するなど大きく手を加え
た一種の改作本である。しかも後半部のそれは、画中歌であったも
のや異時同図法による絵などが見られるところからすると、京都本
同様絵巻形態のテキストであったと思われる。小学館本はおそら
く、この後半部のみの残欠絵巻であったものに、成田本系統の絵を
持たないテキストによって前半部の本文を補い、全体を絵巻に仕立
て直したものであろう。ただし現存本には絵の挿入位置の誤りがい
くつか見られるので、その取り合せ原本ではあるまい。前節に示し
たように、取り合せの接ぎ目と現存小学館本の巻の変り目とが少し
ずれているが、これは、少将の独詠歌(18番歌。『新古今集』哀傷・
八二五)で終る中納言家の場面を巻の終りに持つて来ることによ
って余韻を残そうとしたためか、あるいは物語の舞台が京から住吉へ
と変るところで巻を改めようとしたためであろう。

小学館本の本文の素性について検討してきた過程において、はか
らずも京都本系統のテキストをベースとした改作絵巻の存在が浮か
び上がった^{来た}。小学館本の独自性がその後半部分にあることから
すれば、これこそが真の意味での小学館本系統の完本であるわけだ
が、まだどこかに現存しているだろうか。求めるところに本は現れ
るといふ。めぐり逢える日の来ることを念じてやまない。

注(1) 「小学館蔵住吉物語絵巻について」(『言語と文芸』第六九号 昭45・3)。以下氏の論の引用は全てこれに拠る。

(2) 「住吉物語からお伽草子へ」(『文学』昭51・9)

(3) 成田本・藤井本・京都本・横山本・真銅本(横山重『住吉物語集(本文篇)』大岡山書店 昭18)、徳川本(磯部貞子『尾州徳川家本住吉物語とその研究』笠間書院 昭50)、白田本(白田甚五郎『はつしぐれ(複製と翻刻)』古典文庫 昭42)、多和本(友久武文『多和文庫蔵『住吉物語』—翻刻と解説—』国語学国文学論叢『漢水社 昭53)、住吉本・契沖本(桑原博史『中世物語研究—住吉物語論考—』二玄社 昭42)、御所本(桑原博史『住吉物語 御所本』勉誠社文庫 昭53)、白峰本(友久武文『広本住吉物語集』広島中世文芸研究会 昭42)、陽明本(高橋貞一『住吉物語』勉誠社文芸文庫 昭59)、小学館本(高橋貞一『住吉物語』勉誠社文芸文庫 昭59)、小学館本(泉州本・筑波大本・正慶本・大東急本・資料館本の十九本。最後の六本は手元のマイクロフィルムや紙焼き写真に拠る。なお、本稿中の表においてはそれぞれのテキスト名の頭の漢字一字を略符号として用いる。

(4) 友久武文『野坂家蔵残欠異本住吉物語—翻刻、付その特色について—』(『国文学叢』第四三号 昭42・6)

(5) 小学館本は中巻と下巻の題簽を貼り誤っているので、題簽は下巻とする。

(6) 吉海直人「継子譚としての『住吉物語』再検討—藤と桜の揺れ—」(『国学院雑誌』昭61・12)

(7) 前述したように野坂本には36番歌が見えないが、これは野坂本の親本ではまだ画中に書き込まれた状態であったためであろう。野坂本には、36番歌同様広本系のテキストから連作とすることによって増補された26・39番歌は見えるので、画中之増補が既になされていたことは間違いない。野坂本の親本は増補歌をまだ画の中歌として持つテキストであったわけである。小学館本後半部が依拠したテキストは画の中歌を詞書本文に取り込んでいたものであったという前述の想定と合せると、野坂本の親本は小学館本のような取り合せ絵巻ではなく、京都本系統のテキストをベースとした改作絵巻そのものであったと考えられる。

原本の閲覧をお許し下さった小学館、ならびに種々御配慮下さった佐山辰夫氏に深謝申し上げます。

(筑波大学博士課程 文芸・言語研究科 日本文学)